

津
端
亨
編纂

現代短歌分類辭典

新裝判
13卷

現代短歌分類辞典

新装版13巻

通巻171

平成一年十二月二十五日発行	定價一五、〇〇〇円
著者発行 兼印刷者	津 端 亨
発行所	現代短歌分類辞典刊行所
	代表 津 端 亨
〒345	埼玉県北葛飾郡杉戸町宮前一九六一五
電話(〇四八〇)三八一〇〇四〇番	
振替 東京三一九三二一四	

(ISBN4-87706-170-3)

目

次

目次	歌数	頁数	歌数	頁数	歌数	頁数
ざった〔雑多〕	七	一	さつまじ〔薩摩路〕	六	六	四
ざった〔去った〕	二	一	さつまじる〔薩摩汁〕	二	七	三
ざつたば〔札束〕	八	一	さつまなまり〔薩摩訛〕	一	七	二
ざつだん〔雑談〕	二	一	さつまのうみ〔薩摩の海〕	二	七	一六
ざつちゆうざい〔殺虫剤〕	三	一	さつまのーかみ〔薩摩の守〕	三	七	一七
ざつて〔去つて〕	七	二	さつまはやと〔薩摩隼人〕	四	七	三
ざつと〔颯と〕	一五	二	さつまびと〔薩摩人〕	四	七	三五
ざつとう〔雑踏〕	五〇	二	ざつもくばやし〔雑木林・ぞうきばやし〕	三七	七	二
ざつとうする〔殺到する〕	五	三	ざつもくはら〔雑木原・ぞうきはら〕	六	八	一五
ざつねん〔雑念〕	一四	三	ざつもくやま〔雑木山〕	五	八	七三
ざつばつ〔殺伐〕	七	四	ざつもの〔雑物〕	三	九	三七
ざつぱり	三	四	ざつやく〔雑役〕	二	九	一
ざつぱりと	九	四	ざつよう〔雑用〕	七	九	四
ざつぷうけい〔殺風景〕	三	四	ざつりく〔殺戮〕	一五	一〇	三
ざつぷつ〔雑物〕	二	四	ざつぼろ〔札幌〕	六	一〇	一八
ざつぷりと	二	四	ざてい〔査定〕	四	二	四
ざつま〔薩摩〕	七	五	ざてこそ	四	二	七
ざつまいも〔薩摩芋〕	二	六	ざてつ〔砂鉄〕	二	二	二
ざつまがた〔薩摩瀉〕	七	六	ざてつ〔蹉跌〕	四	三	二
ざつまぐし〔薩摩櫛〕	二	六	ざては	三	三	二
ざつまげた〔薩摩下駄〕	二	六	ざてまた	三	三	三

さとおとこ〔里男〕	一	一九	さとなか〔里中〕	四	二六	さなえた〔早苗田〕	四	二
さとおや〔里親〕	三	一九	さとなれ〔里馴〕	一	二六	さなえとる〔早苗取る〕	二	二
さとおや〔里親〕	二	一九	さとのあき〔里の秋〕	一	二六	さなか〔最中・もなか・さいちゅう〕	五	五
さとかえり〔里帰〕	五	一九	さとのう〔里能〕	一	二六	さなから	一四	三
さとかかり〔里係〕	二	一九	さどーのうみ〔佐渡の海〕	六	二六	さながらに	一八	四
さとかぐら〔里神楽〕	三	一九	さどーのく〔佐渡の国〕	二	二七	さなからの	二七	四
さどがしま〔佐渡が島〕	三	一九	さとのこ〔里の子・里子〕	五	二七	さなぎ〔蛹〕	二	二
さどがしまね〔佐渡が島根〕	七	二〇	さどーのみかど〔佐渡の帝〕	二	二六	さなきだに	三	三
さとかた〔里方〕	二	二〇	さとばやし〔里林〕	二	二六	さなとりあむ〔サナトリウム〕	三	三
さとかは〔里川〕	三	二〇	さとびと〔里人〕	一三	二六	さなみ〔細波〕	三	三
さところ〔小床〕	一三	二二	さどぶし〔佐渡節〕	一	二六	さなみ〔早波〕	二	二
さところ〔里子〕	三	二四	さとべ〔里べ〕	一	二六	さならぬ	二	二
さどごう〔佐渡号〕	二	二四	さとみち〔里道〕	八	二六	さなり〔然なり〕	五	五
さとし〔鋭し〕	四	二四	さとみや〔里宮〕	二	二六	さに〔丹〕	一五	四
さとし〔慧し〕	七	二五	さとみやげ〔里みやげ〕	一	二六	さにつらふ〔狭丹つらふ〕	四	四
さとし〔諭し〕	一四	二五	さとむぎ〔里麦〕	一	二六	さにぬり〔狭丹塗〕	三〇	五
さとす〔諭す〕	四	二五	さとやしろ〔里社〕	一	二六	さには〔狭庭〕	五	五
さとすみ〔里住み〕	九	二五	さとやま〔里山〕	一	二六	さにはべ〔狭庭辺〕	二	二
さとた〔里田〕	五	二六	さととり〔悟り〕	三	二六	さぬ〔狭寝〕	二	二
さとだいら〔里内裏〕	一	二六	さとる〔悟る〕	一	二六	さぬき〔讃岐〕	三	三
さとつぐみ〔里鶴〕	一	二六	ざとる〔座取る〕	三	二六	さぬきふし〔讃岐富士〕	二	二
さとづま〔里妻〕	一	二六	さとる〔サドル〕	三	二六	さぬつどり	二	二
さとてら〔里寺〕	二	二六	さとわ〔里輪〕	二	二六	さぬはり〔狭野榛〕	四	五
さとなえ〔里苗〕	一	二六	さなえ〔早苗〕	六	二六	さぬま〔さ沼〕	二	三

さぬらく	四	五	さば	さば〔澤邊〕	二	六	さひしがつて	二	九
さね〔実〕	三	五	さば	さばみづ〔澤水〕	二	六	さひしからず	七	九
さねおい〔実生〕	三〇	五	さば	さばらふ	二	六	さびしから―すや〔寂〕	三	九
さねかずら〔狭根葛〕	一〇	五	さば	さばり〔障〕	二	六	さびしから―ま―し	二	九
さねさし	二	五	さば	さば〔錆・鏽〕	二七	六	さびしから―む	二	九
さねとも〔実朝〕	三	五	さば	さば〔寂び〕	二六	六	さびしかり	一五	九
さねもり〔実盛〕	五	五	さば	さば―たり〔寂・錆〕	二四	六	さびしかり―けり	三三	九
さの〔佐野〕	八	五	さば	さば―たる〔寂〕	七〇	六	さびしかり―し	三	九
さは〔多・さわ〕	七	五	さば	さば―つつ	二	七	さひしがりや〔淋しがりや〕	二	一〇五
さは〔然は〕	一六	五	さば	さば―て〔錆びて・寂〕	五	七	さびしがる〔淋しがる〕	七七	一〇五
さば〔錆〕	二九	五	さば	さば―て〔寂びて〕	二八	七	さびしかる―べき	七	一〇七
さは〔澤〕	二	六	さば	さば―ぬ〔錆びぬ〕	一	七	さひしかる―べし〔淋しかる―べし〕	二〇	一〇七
さはえなす〔五月蠅なす〕	三	六	さば	さば―ぬ〔寂びぬ〕	二	七	さびしかる―らむ	三	一〇七
さばかり	七	六	さば	さばあゆ〔錆鮎〕	二	六	さびしき〔淋しき・寂しき〕	二四	一〇八
さばかりに	九	六	さば	さびいろ〔寂色〕	五	六	さびし〔淋し〕	八	一〇八
さはききやう〔澤桔梗〕	二	五	さば	さびいろ〔錆色〕	二六	六	さびしき―ころ	三〇	一〇八
さばく〔裁く〕	一〇	五	さば	さびかえる〔寂返る〕	二	六	さひしき―は―なし	一三	一〇八
さばく〔砂漠〕	四	五	さば	さびさびて〔寂々て〕	九	六	さびしく〔淋しく〕	一〇八	一〇八
さばくさ〔澤草〕	二	六	さば	さびさびし〔寂々し〕	一〇	六	さびしく―て〔淋しくて〕	五	一〇八
さばくも〔錆雲〕	三	六	さば	さびさびと〔寂寂と〕	三	六	さびしく―も〔寂しくも〕	三〇	一〇九
さばさばと	一七	六	さば	さびし〔淋し・寂し〕	三九	六	さひしげ〔寂・淋〕	九	一〇九
さはさりながら	二	六	さば	さびし〔錆し〕	五	六	さびしげに〔寂・淋〕	九	一〇九
さばしり	四	六	さば	さびしい〔寂しい・淋しい〕	一三	六	さびしけれ〔淋・寂〕	一〇三	一〇九
さはしる〔さ走る〕	二六	六	さば	さびしう〔淋しう〕	四	六	さびしころ〔寂し心・淋し心〕	二	一〇〇

さびしさ〔淋しさ・寂しさ〕	一九九	二〇〇	さぶ	五	二七三	さほかは〔佐保川〕	一三	二九九
さびしすぎる〔寂・淋〕	二	二四四	さぶ〔荒ぶ〕	七〇	二七三	さほかみ〔佐保神〕	五	三〇〇
さびしそう	一	二四五	さぶ〔錆ぶ〕	三	二七四	さぼてん〔サボテン・仙人掌〕	六七	三〇〇
さびしみ〔寂・淋〕	一〇〇	二四五	さぶ〔寂ぶ〕	三五	二七四	さほど〔然程〕	三三	三〇一
さびしみーて	三五	二四八	さふあいあ〔サファイア〕	二	二七五	さほひめ〔佐保姫〕	一七	三〇三
さびしみーながら	四	二四九	さぶい〔寒い〕	六二	二七五	さほやま〔佐保山〕	四	三〇三
さびしみーにけり	四	二四九	さぶけ〔寒気〕	五	二七七	さぼん〔ザボン〕	四〇	三〇三
さひしみにーつつ	七	二五〇	さぶさ〔寒さ〕	七四	二七八	さまかわり〔様変り〕	五	三〇四
さびしむ〔寂しむ・淋しむ〕	三四	二五一	さぶさぶ	一七	二九四	さまさーず〔覚まさず〕	一	三〇四
さびしも〔淋しも・寂しも〕	三五	二五六	さぶとん〔座布団〕	二	二九四	さまさま〔様々〕	二〇	三〇四
さびしら〔淋〕	四八	二六四	さふらん〔サフラン・泊夫藍〕	二四	二九四	さまさまに	一八	三〇五
さびしゑ〔句〕	一六	二六六	さふらんもどき〔泊夫藍擬〕	二	二九五	さまし〔覚まし〕	二〇	三〇九
さびし声	二	二六六	ざぶり	七	二九五	さましをり〔覚ましをり〕	一	三二〇
さびた	二七	二六六	ざぶりざぶり	二	二九五	さます〔冷す〕	一〇	三二〇
さびたつ	一	二六六	ざぶりざぶりと	一	二九五	さまたぐ〔妨ぐ〕	四	三二〇
さびつく〔錆付く〕	五	二六七	ざぶりと	四	二九五	さまたぐる〔妨ぐる〕	八	三二〇
さびぬま〔寂び沼〕	二	二六七	さぶる〔寂ぶる・荒ぶる〕	九〇	二九五	さまたけ〔妨げ〕	三三	三二〇
さびはてーにけり	一	二六七	さべつ〔差別〕	一八	二九七	さまで〔然迄〕	一〇	三二一
さびゆく〔寂びゆく〕	八	二六七	さほう〔サボウ〕	二七	二九八	さまよい〔彷徨〕	八五	三二一
さびよう〔座標〕	二	二六七	さほう〔左方〕	二	二九八	さまよいーし	二〇	三二三
さびれーたる	八	二六七	さほう〔左方〕	一	二九八	さまよふ〔彷徨ふ〕	六	三二三
さひれる〔寂・荒〕	四	二六七	さほう〔砂防〕	三	二九八	さみ〔三昧〕	六六	三三四
さびる	二	二六八	さほう〔作法〕	三	二九八	さみす〔素水〕	一五	三三五
さひん〔砂浜〕	二〇一	二六八	さほう〔茶房〕	元	二九九	さみせん〔三昧線〕	四三	三二六

さみたるーる〔五月雨る〕	一五	三七	さむけかり〔寒けかり〕	二四	四二四
さみたれ〔五月雨〕	五九	三七	さむけさ〔寒けさ〕	一〇四	四二五
さみたれーのーあめ〔五月雨の雨〕	一三	三〇	さむけく〔寒けく〕	七五	四二七
さみだれーのーくも〔五月雨の雲〕	一四	三〇	さむけさ〔寒けさ〕	六三	四二九
さみたれそら〔五月雨空〕	一	三一	さむけし〔寒けし〕	四一	四三〇
さみとり〔早緑〕	一六〇	三一	さむけなる〔寒げなる〕	三三	四三一
さむ〔冷む〕	二	三四	さむけに〔寒げに〕	元	四三三
さむ〔覚む〕	六	三四	さむけれど	四〇	四三三
さむあめ〔寒雨〕	八	三四	さむければ	六〇	四三三
さむい〔寒い〕	五九	三五	さむさ〔寒さ〕	七〇	四三五
さむかせ〔寒風〕	六	三六	さやけさ	一	四四〇
さむからーず〔寒からず〕	四〇	三八	さやさや	一	四四〇
さむからーぬ	三三	三九			
さむからーむ〔寒からむ〕	元	三九			
さむがり〔寒がり〕	一六	四〇			
さむかり〔寒かり〕	五	四〇			
さむかりーし〔寒〕	二七	四二			
さむき〔寒き〕	三四五	四二			
さむく〔寒く〕	八六	三九			
さむくーて〔寒くて〕	三	四二			
さむくーも〔寒くも〕	三三	四二			
さむくに〔寒国〕	一六	四三			
さむけ〔寒気〕	六	四三			
かんき〔寒気〕	三	四三			
合計	一九、三四三首				

ざった【形動詞・名詞】〔雑多〕

種々のものが入り交っているさま。

一途にわれはおもへど種々雑多なる世間もあり人間もあり①
革命の火が燃えだせば新になるこの多人数の雑多な思ひは④
今日の敵の逃げ足はやてを言ひ交し雑多なる支那大軍の素質を思ふ①
針の孔みづからとほし雑多なるつくろひものに一日はげます②
日日のこの雑多なる事件見よ余儀なきものは何一つなし
春ながき雨にひさしき緑の下その苑に会ふは雑多なる人種①
さった【動詞・助動詞】〔去った〕

あの人もこの人も一枚の紙ひらひらと日の丸の嵐を巻いてすぎ去った

①③ (支那事変統後)

あらしの置き去ったもの、こども、籠のなかにねむってるる③

一枚の辞令が人ひとりつれ去った。誰も誰も自分の明日をみつめる①

(現代短歌大系)

彼女は彼女の道を求めて去った雪解の道私はあるいてゐる①

蚊帳の外に蜜蜂が来て中をのぞいてやがて飛び去った朝のそよ風

傷口は温い血がぬるぬるとして居る、この世から去った戦友に最後の

繃帯をしてやる (支那事変統後)

過ぎ去った小さい時の思ひ出せぬ多くの思ひ出がどこかにあるのだ

過ぎ去った短い年月、六年を水の流れと人は言ふなり (児童萬葉集)

台風がひどくあらしして立ち去ったあとは静かな秋風がふく

台風は日本を荒し立ち去った、にくらしいなあ 悪まのやうに

テレビ見てゐる母の顔は楽しそう、昼のつかれも消え去ったやうに

(児童萬葉集)

土岐善麿 西村陽吉 美禰国樹 相良義重 窪田空穂 上代皓三 橋本華子 花岡謙二 嘉納とわ 生駒あざみ 花岡謙二 宮本晃 森岡妙子 木下智香子 河村義治 清水順子 松岡幸子

ざったば【名詞】〔札束〕

紙幣を束にしたもの。

おびただしき札束といへど手にのせて重からぬかもよ見る眼もうとく

①

騒音の中に札束を数へてゐる、憂鬱になつて来る自分をかんじながら

③

札束を数へつつゐて急速に今朝よりの怒り沈むを感じず①

札束を積み上げし銀行の窓口の子の服を買はむ二千円を待つ

白き敷布にうごく手いくつ声もなく賭けられて積みし大き札束⑬

島にて売りし札束いもの上に投げおきたれば渋こごりつくり③

一と月暮らせぬ金額なれど札束の厚みに子らが手をふれてみる③

ざったん【名詞】〔雑談〕

さまざまのことを気楽に話し合うこと。

家を買へと真顔にて云はれたりしより雑談の度に心冷え来つ①

一日の夜の点呼も無事了へて戦友と雑談するがたのしき

うちとけて雑談しながら、税務史は、要所要所を調べおとさぬ③

海のべのひと夜のやどり共どもに生のはかなき雑談をして③

観世音寺都府楼のあともわれ見たり雑談をしてもとほりながら③

雑談を救はむためにゑがきたまふ君にわが寄り日毎ただあり⑤

睡蓮の咲れる見に来て雑談をたのしみをるに花のしほみけり⑪

泥棒らの品格もひどく落ちたといふこの雑談の短き笑⑦

本党の脱党騒ぎの号外を前に食後の雑談である②

安ものの松買ふべし暇どりに待てる人々雑談に倦まん②

さっちゅうざい【名詞】〔殺虫剤〕

荒木暢夫 金子不泣 田谷鋭 遠藤研太郎 松村英一 鈴木康文 佐々木妙二 田谷鋭 津端亨 佐々木妙二 山本友一 斎藤茂吉 鹿兒島壽藏 窪田空穂 矢代東村 清水信 中河幹子

害になる虫を殺すために用いる薬剤。

温室に立ちかへり見ぬ殺虫剤デリスの青くしげれるさまを③

殺虫剤に冒されて虫が死にてゆく死にゆくまでを吾は見てをり1

さって【動詞・助詞】(去って)

嵐去って木蔭の岩かげのイハタバコ一枚の葉のみじめな傷み⑤

あわただしく去ってゆく人々しかけた仕事を家族を財産をみんなのこ

して⑥

うつくしき鳥飛び去って永き日の春雨細し青柳の門①

人閑に茶店日永しここ去って桃源は路とほからじかも②

それぞれの職場に離れ去ってわが子らをつなぐただ一つのものあるを

信じる③

花びらが一まい一まい さくら散り、風も静かに去っていくなり(児童)

萬葉集

人去って幾度かへる世のさまぞ落葉し果てし城跡のさくら①

さつと【副詞】(颯と)

①風や雨が急に吹いたり降ったりするさま。②動作が素早く行われるさま。

池の面にさつと投ぐればあはれるな小さき魚がよろほひ泳ぐ①

稲の葉は青きが中に黄をさしてさつと金泥なすりたるごとし⑫

うち顫ふ本草とともにここちよう颯と身に浴びぬ青き秋かぜ②

思ひ定め颯と踏出しぬ足下に軌る氷の音のよろしさ⑥

折しもあれ雲洩れいでし月の前投網はさつと開きたるかも

風さつと吹きて冷しき秋ごち山里なればまだきにおぼゆ⑦

さつとばかり吹く夏風にとび立ちし驚たゆたひて青空に白き

土屋 文明

関 得一郎

小宮 良太郎

西村 陽吉

正岡 子規

岡本 大無

佐々木 妙二

真草嶺 光子

野沢 柿葺

花田 比露思

金子 薫園

岡 稻里

蛭名 久雄

依田 秋圃

岡 麓

新居 滋子

颯と躍り込むボールのかがやく歓喜に手も足も抱きすくめられてしまふ⑫

白馬の背に立つ娘ブロードなり笑む顔がさつと我が前を過ぐ①

すみ切った青空見れば飛行機のさつと流れるあの白い線(児童万葉集)

戸をくればさつとむし来る朝あつし今日もまたしもあつしとかこつ①

ドアあけて人入り来れば寒風のさつと入り来るここは信濃路

メスの秀の一條さつと截り開く若き組織の快き張り(新万葉集)

山おろしさつと音たて青麦の畝を光らせ走りけるかも(あをぞし)

さつとう【名詞】(雑踏)

人々が太勢集ってこみ合うこと。

赤き頸振り振り地下をのぞきあるパワーシヤベル見ゆ雑踏のかたへ

(虚像の橋)

浅夜にてほてりは冷えぬ雑踏の人のゆききよ何のためにか

足跡なげ風紋の上を踏み凹めまたバス乗場の雑踏の埃⑤

足細き人形のたちてゐる売場雑踏の底のふかき空漠③

危さの決断つかぬ雑踏に風船ありて無難にあがる③

うつくしきナボリの浜の雑踏も言葉わかばさびしくぞおもふ(新萬葉集)

馬市の雑踏のなか獣のにほひに酸ゆき体臭まじる(読者)

カナリヤは歌忘るなし銀行のこの雑踏の中にありても②

顔見ればすでに言ふことなくなりて雑踏の中を並びて歩む①

既遂待ちて手首つかめばにぎりたる銭こぼれ落つ雑踏のなか①

今日もまた夕の街の雑踏に対してわれは眼をとちてあり①

靴靴靴靴みがきの男は特急時刻の華美な雑踏をみがきつづける③

土岐 善麿

野田 孝之

木下 賢一

豊島 晃

豊島 晃

岩井 弘行

鶴沢 政司

高安 国世

川上 小夜子

植松 寿樹

久方 寿満子

清水 恒子

藁谷 みか子

真鍋 美恵子

品田 聖平

黒沢 武子

御供 平信

近藤 元

清水 信

声となる旗となる雑踏となる帰還兵士を迎へるこの不生産小都市④	清水 信
コンベアより絶間なく土落ちて居り雑踏と距つ板囲いの中 （村野四郎）	高安 国世
歳末の街の雑踏をしきりたるしづけき壁のひるの食卓③	四賀 光子
さりげなき構内マイク吾を呼べり追尾をふめて雑踏を去る①	御供 平佑
三人が酔ひ三人が酔はぬ会果ててかにかくに愉し夜の雑踏①	武川 忠一
雑踏に紛れむわれを振り返りわれの何をば見たらむなる1	三木 アヤ
雑踏の青物市場軒先の鳩の出入りは人知らざるも （多磨二）	草野 松彦
雑踏の隙間より入り来し個愁かもやりがたき念ひに街なかあゆむ②	北見 志保子
雑踏のなかに立ちどまり咳入りぬわれの無惨を曝す想ひに②	久保井 信夫
雑踏へ一個の荷物にすぎない私がおりる。市街のにぶい冬日ざし①	生駒 あさみ
雑踏の桜隧道外れてきこゆダンス・パーティーの伴奏あはれ① （老節）	印田 巨鳥
雑踏の歩廊を帰る子が背をかなしむやがて寂しくなりぬ④	千代 国一
雑踏の中に二時間程待たされて失業登録を今済したり	安藤 皓美
雑踏はいま夕映えの中にして吾ら二人のめぐりに紅し	西山 健太郎
しづかなる瞳たもちてひとときの雑踏の中を足早に出づ①	前田 透
新宿裏にいま何が起つてゐようともし街の雑踏のむしろ静かな流れ③	佐々木 妙二
昏れどきの町の雑踏にきこえる関橋のあがる警笛 （坂橋）	真鍋 美恵子
地下道ゆき雑踏に突如倒されんすでにためぐり若人ばかり②	中河 幹子
停車場の雑踏の中で会つた人の瞳の愛しさをこころにひそめる③	金子 不泣
手締のおと背後にひびく雑踏のなか昔思はず何がありしや⑤	松村 英一
東京の雑踏の人にゆき交り何をいそぎてわがをれるにや⑧	高田 浪吉
東京駅の雑踏の中に母上のみ骨抱きてわれら相寄る	清水 恒子
亡き夫の姓を呼ばれて振返るプラットフォームの雑踏の中に （朝日短歌二）	畠内 正子
話すこともとぎれとぎれに新宿の雑踏をぬうて友とゆくかも （新万葉集八）	三村 ふさ子

「春の海」鳴らしつつゆく車あり退け刻のこの雑踏の中②

ひえびえとしたる店頭息づまる熱き雑踏すべて地下の街（虚像の鳩）

表情もなく踏切番は旗振りて夕暮時の雑沓を断つ（新万葉集二）

街の雑踏の中に紛れ込んでばつと又光の前に現実を逃避するでもなく⑬

金子 薫園

無雑作に包みくれたる茄子の名提げて雑踏を肩にわけゆく③

大岡 博

無数の顔交しゆく雑踏に不思議な人間の疎遠があるなり③

初井 しづ枝

むんむんする駅の雑踏の電灯のシェードをさげてゆく人のあり②

中河 幹子

めまぐるしき満人街の雑沓を見つし行くにわれは疲れぬ

長谷川 銀作

山深く住みたき心今日もまた雑踏の中にふと湧きにけり（新万葉集三）

貴志本 聖二

呼ばれしは空耳なるか振り向けば雑踏のなか乾きし人の面①

海野 登紀

夜深きネオンの空に動悸しき雑沓（ぎんぎ）の中の一人の私①

藪 阿久里

冷房より洩れ出るわづかなる風を折々感じ雑踏を行く⑦

高安 国世

尾張町の雑踏のなかに聴きとめしうつくしきこゑはしばらく消えず①

大野 誠夫

さっとうする【動詞】〔殺到する〕

多数の人や物が一度にどつと押し寄せる。

いくさある大きな年とて四方より悲願をもちて殺到してたる⑧

太田 水穂

殺到する献金部隊、モンペに赤ん坊背負った女もある⑤

矢代 東村

花が育つ温室あをく野に伏せり破れしガラスに風が殺到する③

鐸 静枝

街に出てみる赤いガソリタンクが街路を突走る人人みな後むきに殺到する

前田 夕暮

ざっねん【名詞】〔雑念〕

気をちらせるいろいろな思い。

暁のさ夜床にするうつつなき雑念たりともたのしくあらな①

米川 稔

落葉焚くかをりただよふあき庭になほ雑念のやるかたもなき③

河杉初子

きよらかに眼洗うてゐて何の雑念もない、春はまだあさいと思ふ①①

前田夕暮

さらさらと雑念あらひながして、朝の湯あがりの楊のみどり

前田夕暮

雑念をふりはらひ心ひとすぢにきこえない深夜の雪を聞く④

米田雄郎

念仏は唱へてをれど雑念が過ぎれば重し廻す大数珠

白石圭子

春あさい日の障子しろじろとたてて何ら雑念なくをられる①

前田夕暮

降り細る春の雨なり雑念のゆきてとどまる処を知らず①

桐田落村

ぼんやり秋のあをぞらを食べて俺に雑念がない③

米田雄郎

まつはりて鬱々くらき雑念にこの頃われの負かされてゐる①

遠山夕雲

もろもろの雑念を刈る鎌に似てころよきかな初秋の風①

高橋英子

幽居にてひとり死にゆきし英雄のことけふの雑念にうかびてのこる②

横田専一

善し悪しの見えぬ眼に雑念のかなしき性を持ちて生れし①

沼波美代子

さつぱつ【形動詞】〔殺伐〕

人を殺傷するのを何とも思わないような荒涼としたさま。

朝に夜にラヂオが叫ぶ殺伐なる凄惨なる言葉耳を掩はしむ

渡辺順三

油日の大野指すガイド声殺伐として冬雲の翳①

印田巨鳥

殺伐たる妄想をもちて歩み来つつわれの呼吸いつかあらあしかり①

米川稔

殺伐なる活字に慣れて日々を読むわが新らしき感傷や何①

中村正爾

殺伐に日日ありへつつひたすらに心あえかなるものを求むる②

相良義重

殺伐の世は堪へ難し草も木も人もうるほひありて安らぐ①

花田比露思

さつぱり【副詞】

さつぱり切つてしまはば気分も晴るべしと撫でし顎髯の黒々と死顔に

ある①④ 土岐善麿

一生ゆきさつぱりと腹を切り果てける男の骨の朽つることぞなき① 金子信三郎

毎日ひる糞でさへこれだいいと思ふほどさつぱりひつた事があるか⑦ 矢代東村

さつぱりと【副詞】

①清潔で整っているさま。②（性格や味覚などが）淡泊なさま。あつさりしたさま。③気持の爽快なさま。すっきり。④何も残らないさま。すっきり。⑤（下）に打ち消しを伴つて。全く。まるっきり。

小さつぱりとした小市民層のながれ、街灯のスキツチはあるところに

ある④ 清水信

さつぱりと争ひを断つと言ひし声信じて夕べ胡瓜をきざむ

岡美津子

さつぱりと一風呂あびて縁側で一服だこほろぎのこる②

清水信

つらなりて靴磨き並ぶガード下ツープースさつぱりとした女あり④

堀内通孝

早起きしてさつぱりと着物着かへたればおのれ心の改るおぼゆ①

金子信三郎

一生ゆきさつぱりと腹を切り果てける男の骨の朽つることぞなき①

金子信三郎

舳ひをへて甲板にあらはれし船人はさつぱりとしたる浴衣を著はしむ

橋本徳寿

湯上がりのさつぱりとしたころもち児とねころんでみかんだべてる

清水信

さつぷうけい【名詞・形動詞】〔殺風景〕

①自然の風致に乏しいこと。（殺風景な土地）②人に風雅の趣が欠けていること。何んのかざり気も面白味もないさま。「殺風景な人」

救世軍の女士官が立つてゐて殺風景に暮れる街角

花岡謙二

草木なく岩ばかりなる殺風景登りて知りし八合目の不二山

津端亨

ざつぷつ【名詞】〔雑物〕

一物を持たじと思ふねがひまた空し室内雑物に満つ②

川浪磐根

爽雑物のその根断たんとふりあげし手にしてまた空しくおろす④

館山一子

ざつぷりと【副詞】

①多量の水を一度に浴びせるさま。ざんぷり。②物を勢いよく切るさま。ざつくり。③しぶきが勢いよく飛散るさま。

ざつぷりと北極熊の入りし池の一時にゆらぐ波の冷たさ① 野田孝之

さつま【名詞】〔薩摩〕

旧国名の一つ。鹿児島県西部にあたる。

あかあかと西の薩摩に残る日の照りかえしたる霧嶋の牧^⑬（現代短歌全集）
あかときの風ほのふけば薩摩野の野面^{のづら}をきりの立ちまどふかも（アララギ故人）

與謝野 寛
堀内 卓

哀れなり薩摩に別れ実彦に別るる駅の夜半の涼しさ^⑬

與謝野 寛

幾そたびあゆみぬらして薩摩山谷のいは川うちわたるらむ

八田 知 紀

いたづらに薩摩はとほしたらちねの父のくるしみわかつよしなし^②

森 園 天 涙

いつの世も新しきことはに似よ薩摩の殿のギヤマンの壺^⑬

與謝野 寛

いづこにか泊りさだめん薩摩がた八重の汐路にうかぶ大船^⑤

樋口 一 葉

指宿^{いぶすき}に西瓜を買ひてわが帰る薩摩の途に紫薇赤く咲く^⑳

與謝野 晶 子

今は身を世のあるままに任すれば薩摩にも来ぬ高千穂も見ぬ^⑬

與謝野 寛

甘藷の葉に初冬の陽の照り温み南薩摩の甘藷畑ひろし^⑧

川 田 順

美しく世盛り人にくらぶべき川の流るる西薩摩かな^{②②}

與謝野 晶 子

海きよき南薩摩を過ぎむとし古き歴史の断片も好し（のぼり路）

斎藤 茂 吉

梅寒き宿屋の二階すみの部屋夕日の薩摩明らけく見ゆ

若山 牧 水

怨むことあらずて身をば投げなまし薩摩の国の川内の川^{②②}

與謝野 晶 子

英艦を打ち払ひたる名残とも薩摩の入江見えてけぶりぬ^⑬

與謝野 寛

祖父も父も生れたるふるさとの薩摩に往て世を経むかわれ^⑰

吉井 勇

帰しやりかへりはしつれ遙かなりいやはるかなり薩摩の国は^①

橘 宗 利

聞き知らぬ薩摩の国の方言もすべて思ひぬ恋の謎かと^⑬

與謝野 寛

北見より南薩摩をうちわたす道のしるべの顔並びたり^①

太田 青 丘

享年十四才と記す墓あり薩摩には若き男子は死に絶えしとふ^④

山田 百合子

国原は朝靄かかり遠とほに大隅薩摩桜島見ゆ（多摩四郎）

渡辺 肇

月光に比すべき川の流るるや薩摩の国の川内郷に^{②②}

與謝野 晶 子

月光の裾に薩摩の海引かれほの白きこそあはれなりけれ^{②②}

與謝野 晶 子

越路にも紀にも吉備にも薩摩にも待酒すとふ友の多きを^⑭

川 田 順

言荒く叱りいましむるわがふみに驚き居らむ薩摩の子らは^⑩

釈 迢 空

事足らふ薩摩の旅に見ぬは唯だ太鼓踊と板の三味線^⑬

與謝野 寛

薩摩なる豆打ち太鼓われ所持し龍太が来れば共に遊ぶよ^⑤

吉野 秀 雄

薩摩には無き棗の木旅順よりの父のみやげときけば懐し^④

山田 百合子

薩摩にも長門にも父は生まれずて吉備の奥より身を立てたまふ^⑭

川 田 順

薩摩の国ここみんなみの涯にして巖の碕にきほふ黒潮^④

松岡 貞 総

薩摩の子親の名づけし雄々しき名一つを抱きオロシヤに行く^⑥

植松 寿 樹

寂しければ薩摩へ往きし初旅のことなどおもふ爐の端にして^⑱

吉井 勇

島との狭き湍戸を青波は泡立ちて流る薩摩の湍戸よ^①

久松 潜 一

生国の薩摩へかへるよろこびを吾こそは知れ君は亡骸^⑭

松村 英 一

白髪岳市房山もふりさけて薩摩ざかひを汽車は行くなり^③

斎藤 茂 吉

十二月薩摩半島の磯山にてすみれの花に妻は眼ざとし^{⑨⑧}

川 田 順

乗雲の薩摩ゑがかれ給ふなる麻布の上の墨と見ましや

服部 嘉 香

生国は南薩摩と聞きしのみ水をわかつてあひ別れたり^②

山本 友 一

その中に海のなびける太陽と南薩摩の青きあけぼの^⑬

與謝野 寛

そのむかし薩摩へくだる初旅の船のさまなどふと思ひ出づ^⑬

吉井 勇

戦ふは海隣にしあれど隼人の薩摩のはての部落もおちつかず^⑧

川 田 順

てる月はそこにしづめど薩摩がたひかりは今もかがやきにけり（新萬葉集別）

津軽 承 昭

汝が行く薩摩は麦の秋日和阿蘇霧島も晴るるころとて^⑤

太田 水 穂

なぎさうつ潮干の音のかそけくぞ薩摩入江は夜に入りにつけり

堀内 卓

なつかしき薩摩大隅あるは皆おのが心のふるさとの山⑬	與謝野 寛
夏蜜柑赤きばかりに熟したる薩摩の春はとのぐもりせり	内田 恵太郎
汝が行く薩摩は麦の秋日和阿蘇霧島も晴るること⑤	太田 水穂
似たる胸、静まりゆけば、天さかる、鄙の薩摩し、さやに見え来も	釈 迢空
隼人の薩摩のはての宮方の名もなく死にて御代を護りき⑭	川 田 順
隼人の薩摩男の大ふぐりいく世の史のうへにまぎれず (新萬葉集八)	安 田 尚義
隼人の薩摩の子らがうたふ歌のいのちにひびく波の音かな⑤	太 田 水穂
はやびとの薩摩の刀あな清け生麥村に血を流したり⑪	川 田 順
隼人の薩摩獵師ら榜ぎ出てて釣りあぐる鰯はここからも見ゆ⑧	川 田 順
隼人の薩摩男子が海越えて征きしは歴史に幾たびならむ⑨⑧	川 田 順
はろばろと薩摩まで行きなつかしき人あるがため山あるがため⑬	與謝野 寛
光敷く薩摩入江を大隅に真向ふ船は波もさやらず (新萬葉集七・アララギ故人)	堀 内 卓
ひたむきに思ひつむれば今はわが薩摩の国もとほしとせむ①	橘 宗利
船に寝て母恋しやとおもひる薩摩へくだる初旅にして	吉 井 勇
南薩摩のはての岬に浪かぶる岩のいくつを心に留めつ (のぼり路)	斎 藤 茂吉
南薩摩揖宿郡潟口の浜に在る我に卯月望の月④	吉 野 秀雄
見はるかす薩摩国原うち展げ距離まさやかに桜島見ゆ (多磨三)	加 来 博実
みゆきまつみなみ薩摩の青雲に千羽の鶴の舞ひのゆたけさ (新万葉集二)	川 上 登代
桃は散り日毎にぬるき風吹きて薩摩は初夏のさびしさに入る①	森 園 天涙
山のひだ幾重かぬひてわが汽車の行かば行きつく薩摩国原②	高 田 保馬
王城といふ語に感傷する青年ここに迎へぬ清の使薩摩の使	橋 本 徳寿
吾が歌碑の工事をいそぐみさきには薩摩野菊の茂く咲き居らむ⑩	川 田 順
わが住める薩摩の国は行くとして明ろきに過ぎよりどころなし	岩 谷 莫哀
わが万里山の重味を持つ君と共に薩摩を行かぬ寂しさ⑬	與謝野 寛

我を見て薩摩がすりのふところに魔法の鳥の住むと人云ふ①
幼かる吉野の皇子の御座船は薩摩の海のここに泊てにき⑭
をしどりが棧敷を作り見ると云ふ薩摩の国の青き川かな②

さつまいま【名詞】〔薩摩芋〕

ヒルガオ科のつる性多年草。中米原産、中国、沖縄を経て17世紀日本に渡来。18世紀には青木昆陽が救荒作物として普及させた。茎は赤紫色、卵形形の葉を生して塊根とする。食用の他、でんぷん、ぶどう糖、アルコール、焼酎の原料とする。

慌しく逃れしあとかかんのの上にふかしたるままの薩摩芋あり
渡 辺 直 巳

さつまがた【名詞】〔薩摩瀉〕

薩摩瀉嶋も神ある高山も皆みやびかに寄りそへるかな②
薩摩瀉秋の淡日に白いとを引けると岸の小波のてる
堀 内 卓

薩摩がた沖の波まにかけ消えし月は今こそあらはなれにけれ①
昭 憲 皇 太 后

薩摩瀉小鼠ほどの美しくし嶋見ゆ霧の厚き朝にも②②
與謝野 晶子

薩摩瀉嶋も神ある高山も皆みやびかに寄りそへるかな②
與謝野 晶子

薩摩瀉笠沙の日の出おもひつつ筑紫の旅を恋しみて居り
吉 井 勇

薩摩瀉ほのぼの霧の晴れ行くや息に疊れる鏡の如く②②
與謝野 晶子

さつまぐし【名詞】〔薩摩櫛〕

薩摩櫛あらきさつまのはやり男の恋ひとすぢにつのるかなしさ①(現代)
水 町 京 子

薩摩櫛させさせと云ふはやり唄聴こえてかなしいまの幕切れ⑬
吉 井 勇

さつまげた【名詞】〔薩摩下駄〕

下駄の一種。駒下駄に似て台の幅が広く白い太い緒をすげた男用の下駄。

薩摩下駄足にとりはき杖つきて萩の芽摘みし昔おもほゆ①
正 岡 子 規

さつまじ【名詞】〔薩摩路〕

薩摩路の磯づたひする我が心ナポリに在りし日の如きかな⑬
與謝野 寛

薩摩路はみなみ遙けき潮けぶり開聞岳もいま暮るるなり (新萬葉集五)

田中 晃

薩摩路の真夏の山に盛り上がり汗かくごとく光る樟き樹⑬

與謝野 寛

生ながらむかし食らひしからいもの畑見ゆ既に薩摩路の山⑬

與謝野 寛

法師にてこの薩摩路に下りつる親々のこと語れば悲し⑬

與謝野 寛

豊かなるみのりの予想空しきか薩摩路はいま台風圏に入る (朝日短歌二)

本田 厚志

さつましる【名詞】〔薩摩汁〕

とり肉・豚肉などに大根・ゴボウ・里芋などをたして濃厚に仕立てた味噌汁。

大鍋の薩摩汁すでに煮れたちをり今朝来べしとふ兵を待ちゐる④

朝吹 磯子

さつまなまり【名詞】〔薩摩訛〕

わが遠きおもひでのなかにいまもゐる薩摩なまりの古唄かも⑬

吉井 勇

さつまのうみ【名詞・助詞・名詞】〔薩摩の海〕

晴れわたる薩摩の海を双眸にをさむる家の朝のかなしみ①

森 園 天 涙

夕ぐれに茉莉の花のにほひする薩摩の海と思ひてつたふ②

與謝野 晶子

さつまのかみ【名詞・助詞・名詞】〔薩摩の守〕

無賃乗車。又それをする人。

いづくまで川を伝ふやいにしへの薩摩の守の京泊まで②

與謝野 晶子

いにしへの薩摩守が社ありし産石おほひて松ふりにたり⑩

安 江 不 空

さつまはやと【名詞】〔薩摩隼人〕

①薩摩の武士。②鹿児島県出身の男性をいう。

こぞり起ちし薩摩隼人の雄たけびをこの秋風のなかに聴くなり②

三 浦 義 一

爆発のいづとも知れぬ火の山を愛しみて幾世薩摩隼人は②

中 河 幹 子

榎木垣に倒れたるをわが立て直す薩摩隼人有村次左衛門の札⑭

松 村 英 一

さつまびと【名詞】〔薩摩人〕

いにしへゆ薩摩人の愛でやまぬ燃ゆる思ひの桜島山②

中 河 幹 子

薩摩びと腕まくりせず焼酎を飲まぬ世あらば寂しからまし⑬

與謝野 寛

薩摩びと嶋の話もこと旧りぬ今はみづから火の柱せよ⑬

與謝野 寛

はやびとの薩摩の人あさもよし紀人も今日は来つつ弔ふ⑩

川 田 順

ざつもくばやし【名詞】〔雑木林〕〔ぞうきばやし〕

秋深き雑木林を歩むとき疲るるごとき思ひにまどふ②⑥

八 木 佳 信

いりつ日の海を見下す山の上雑木林にむせぶ風あり

早 川 玲 子

美しかりし黄変はすぎて雑木林の傷める色は冬に入らむとす①

常 見 千 香 夫

礦山へ越ゆる峠の片岡の雑木林はいまだ芽ぶかず①

大 場 寅 郎

北多摩の雑木ばやしに分け入りて遂に帰らぬ身となりけり①

井 出 一 太 郎

雲ひくき雑木林のひとつところ小梨あかるく今花ざかり⑥

朝 吹 磯 子

梢高き雑木林を透く空の深きところに飛行雲湧けり (鳥媒花)

上 岡 勝

山腹の雑木林に道あらしたきぎを負ひて人下り来る①

染 谷 進

雑木林きりひらきたる墓はらに黄にむらがりて咲ける山草①

山 口 茂 吉

雑木林の向ふに日は落ち岡の上にわれはかなしきことおもひるつ③

安 田 章 生

霜晴の雑木林の上にある棚雲しろうく張りてくづれず (新萬葉集二)

川 路 廸 郎

白雲の消えん気もなきかたまりが雑木林を照らす頃かな②⑤ (岩波文庫)

與謝野 晶子

新芽ふく雑木林の静けさに今朝また鳴くか一羽筒鳥 (安達太良)

中 西 悟 堂

瀬戸岡の雑木林の夕冷えに河原千鳥のこゑ徹るなり (安達太良)

中 西 悟 堂

雑木林真昼の空の明るみに煙一すぢ立ちのぼり見ゆ

島 木 赤 彦

雑木林にあめふるおとのかそけきはみもごる妻が覚めて言ひにき (新萬葉集五)

金 子 信 三 郎

散りつくす葉に命ありここにして雑木林はおくつきの如し①

沼 波 美 代 子

露じめる雑木林の落葉ふみさびしき足音ききつつあゆむ

古 泉 千 樫

遠山もあちらの丘もこの原も雑木林なり静かなる村

川 久 保 俊 一

那須岳がしばらく見えて谷に入る葉をふるひたる雑木林径①	松井如流
新芽ふく雑木林の静けさに今朝また鳴くか一羽筒鳥 （安達太郎）	中西悟堂
庭の西雑木林に小鳥の巢懸けよとすすむる客もありけり①	岡崎義恵
野のはての雑木林に虹たてる見ゆあす行かむ雨のあがりのしめじ生ふ べし③ （五）	小杉放庵
箱根路の荒石肌の上に生ふ雑木林の斑雪あかるし①	立花馨
はたけには昼過ぎて人居らずなり雑木林のかつ散りにつつ （宿墨詠草）	岡麓
春ま昼雑木林に打ちひびく木を伐る音のリズムを楽しむ （多磨三）	石川かう
日おもての山の片側の雑木林赤味を帯びてうちけぶりたり	小宮良太郎
低山の雑木林をかすめ飛ぶ鶺鴒 （ひび） くこる春は来りて⑤	高田浪吉
ひと雨ごと雑木林に若芽たち姑の好める山椒が匂ふ （明治神宮歌詠）	井上しげ
陽の光にじむがごとく見えそめし雑木林の春浅き色	金子薫園
道入れる雑木林にひともの辛夷白花にほひてありけり①	古泉千樞
三葉四葉は目をやるかたに散れるなり雑木林の中すく明りに	稲森宗太郎
麦畑のはたてに続く雑木林萌え出でし芽の花かとも見ゆ （新万葉集二）	伊草藻呈
武蔵野の雑木林を俯して見る枯草山の晴れしひるすぎ⑥	金子薫園
武蔵野の雑木林を見て足りぬこの人いかにあり佗びぬるむ② （はたちのうた）	中原綾子
夕焼けに黒々見ゆる雑木林に突然機関銃がつづけて鳴りぬ （支那事変戦地）	中野補登
若葉せる雑木林のなかにありて君がみ墓はあたりひそけし①	山口茂吉
ざつもくはら【名詞】「雑木原」「ぞうきはら」	
雑木原母の好みし木苺の青実はたりぬ色づくもありて	上山幸子
雑木原黄葉 （もみぢ） のなかを伴れゆきつ吾が子ものいへされの明るさ （多磨三）	見沼冬男
雑木原しづる雪の煙りつつ杳くかなしく啼く鳥のあり	山田恵美子

みちのくの弥生半の雑木原眼にたつほどはいまだめぶかず②
胸つかへ唾液（つよき）乾きぬ雑木原軒白き樹に陽のある曇り①
夕もやにゆれつつおくり雑木原山鳥は立つわが足おとに（鶯）

ざつもくやま【名詞】「雑木山」

種々の木が入りまじって茂っている山。

朝あけの月の残れる雑木山慈悲心鳥も筒鳥 （つづみ） もなきいづ	久保田不二子
天つ日の照る日のなかをあゆみをり土手の向うの雑木山のあたま②	橋田東声
入りくればこの雑木山白は寒しところどころにひこばえしげり②	菊池知勇
枯れのこる小笹のありて雑木山細木かげひきあたたく見ゆ②	松本常太郎
くだり来て日暮れはてたる雑木山何に荷馬のくらくまだある （多磨三）	芥子沢新之介
雑木山雨に芽吹き彩頭ちぬ思ひいづるも逝きし子の上	上山幸子
雑木山紅くなりたる上の山霧ふかくしてあさ々見えず④	久保田不二子
雑木山朝に見あるき夕べにも見てめぐるなり足の向くまま	北原白秋
雑木山樹々の紅葉のいろ寒く朝間の峠しぐれきにけり	小林歩三
雑木山伐りて山根にくだす枝は炭小屋のうへにあまたつもれり①	鈴江幸太郎
雑木山しんかんとして青天に風花あそぶちらりほらりと④	小杉放庵
雑木山送電線 （そうでんせん） が高々と横切つてゐて向ふ夏の雲雲②	清水信
雑木山あさややたけていづる日のひかりをふくむ枝々の雪	太田水穂
雑木山のふかい落葉につもる霜、朝日がさせばみな露となる④	西村陽吉
雑木山のぼりきはめて目にさむし杉生のとよみはるかなりけり （新萬葉集一）	石上堅
雑木山登りこゆればいただきは西につづきて松の砂山①	三井甲之
雑木山日のくれぐれを雨やみて葉裏揉み返し吹き荒るる風①	清水乙女
雑木山松山なべて雪にくらむ能登は行けどもたかからぬ山①	御供平佑

雑木山斑雪になごむ日の闇けをひとところ蒼しそよぐ（多磨三）
 雑木山芽ぐむを見れば紫にうすがすみつつ家居とぼしき③
 雑木山雪ふかくして日暮よりしぐるる雲はひくくなづさふ③
 雑木山夕べわけ入る道の細りくれなる暗し山つつじの花②
 雑木山を四軒ばかりも歩ききて足ほてりせり君の座敷に②
 雑木山を吹きおろす風は咲きみつる桜をバスに吹きみだしつ
 しとしと雨のふりゐる雑木山濡れ葉をもれて栗の毬みゆ④
 白雲は湧きて消えつつ雑木山芽ぶきの紅き時とはなりぬ
 炭焼くと伐り継ぎたらむ雑木山はかなきまでに明るみわたる④
 木炭山とひとのたてたる雑木山木々はきほひて芽ぶきたるかも
 雑木山朝に見あるき夕べにも見てめぐるなり足の向くまま
 雑木山通草の花のほろほろと咲けるしたびにさす茜かも
 雑木山の樹下あかるき若葉風たへぬ思ひは人にもいはじ②
 雑木山の木した明るきわか葉風たへぬ思ひは人にもいはじ多磨一
 雑木山晴れ澄む空にぬき出でて一樹の合歡の花の明るさ①
 雑木山ひくくなり来てつき出でし国境なる村の道のべ④
 雑木やま山道ふかく帰りゆく小学生多し富士見の村は⑥
 雑木山より突然に下りて池隈の稲刈人をおどろかしたり②
 雑木山落葉しつくしこの頃の冬日に光るは椿と青木②
 雑木山わか葉明るく重なりて空おほふ雲の白く動かぬ
 雑木山を四軒ばかりも歩ききて足ほてりせり君の座敷に②
 谷てらす晝の光に雑木山の枯生すきつつ伐る人の見ゆ①
 散りつくし明るくなりし雑木山落葉を歩む鶴鶴の見ゆ
 梅雨雲に日のたけてゆく雑木山きのふもなきし郭公の啼く⑧

大野 義雄
 久保田 不二子
 久保田 不二子
 川島 園子
 平野 宣紀
 北見 志保子
 太田 水穂
 西沢 三千枝
 松岡 貞総
 若山 牧水
 北原 白秋
 太田 咬一
 北見 志保子
 北見 志保子
 鶴木 保
 高田 浪吉
 今井 邦子
 山下 陸奥
 木下 利玄
 窪田 空穂
 平野 宣紀
 加藤 洵綾
 椿 武子
 太田 水穂

列並めて梢細なる雑木やま日はあたりつつ温むともなし
 野は、昼のさえしづまりに、雑木山あらはに、赤き肌見せてゐる⑨
 春すでに流るる雲に光りありゆくくたのし雑木山みち①
 ひんがしも西も窓ちかき雑木山山よりゆふ吹く風のあり①
 冬の日のなにか明るき雑木山あらはの木々にこころ寄りゆく②（多磨四）
 まろ形の雑木山ねの幾つものがひくく起伏す黄ばめるさまに⑧
 蜜柑剥きつつ窓より見たる雑木山汽車はいっしか下りとなれり（地盤以）
 脈々と緑素がなみうつ雑木山朝の微風は香料である②
 紫にけぶると見れば雑木山やや遠くして靄立てるなり①
 横岳の裾野につづく雑木山昼の月ひくく現れてをり①
 ざつもの【名詞】（雑物）
 一物を持たじと思ふねがひまた空し室内雑物に満つ②
 爽雑物のその根断たんとふりあげし手にしてまた空しくおろす④
 ざつやく【名詞】（雑役）
 雑役の職務一年三ヶ月径て正職員なり連結手われの位置①
 町内会外燈組合の雑役も重任再任となりてのがれ得ぬ④
 ざつよう【名詞】（雑用）
 カレンダーに書きこむ事項悉く雑用にしていのちに触れず④
 口割って頭あがらぬこのわれや雑用などもさせらるるなり
 雑用多き昼の労れも忘れはてもの言ふごとく星座に対ふ（多磨三）
 雑用もや々片づきし夕にて風はさるすべりの花を咲くる（朝日短歌二）
 北原 白秋
 釈 迢空
 太田 青丘
 村田 利明
 室伏 健一
 高田 浪吉
 橋田 東声
 清水 信
 塚田 菁紀
 久保田 不二子
 川浪 磐根
 館山 一子
 御供 平信
 相良 義重
 高橋 希人
 津端 修
 森田 三津子
 野中 静子